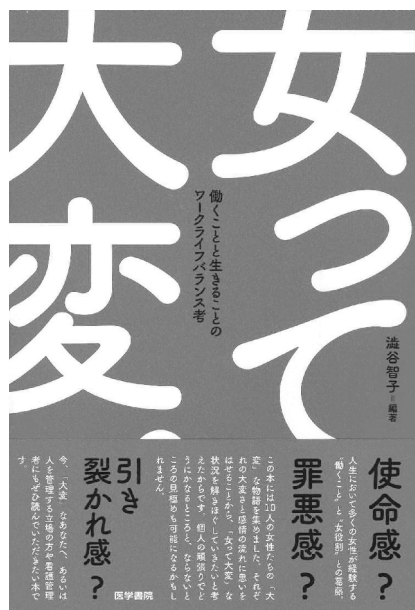




女って大変。 働くことと生きることのワークライフバランス考

澁谷智子 編著

定価1890円(本体1800+税5%)
医学書院 ☎03-3817-5657

「す、すごい！こんなことまで書いてちゃっていいの?」
読み始めて驚き、戸惑い、読み終えて「私だけじゃなかったんだ」と思った。
この本には10人の女性たちの「大変」な物語が集められている。さまざまな責任を抱え込み、こなせず、イライラし、自分のことも周りのことも責めてしまう状況を書いた人。「自分らしく生きること」とも「母であること」とも大切なのに、その両立に苦しんで葛藤する思いを書いた人。それぞれの立場で、迷いながら、試行錯誤しながら、自分なりのよい方向を目指して、前に進もうとしている女性たち。

私が読み始めたときに感じた驚きと戸惑いは、これまで当たり前のこととして公にされてこなかった「女の大変さ」が、表に出ていることに對するものであった。読んでいくうちに、私はそれぞれの話に引き寄せられ、はまりこみ、まるでその物語の映画を観ている観客のような気持ちになっていった。そして、「自分の大変さ」を語りたくなっていた。

私は幼いころ、何かにつけては「男だったらよかったのにねえ」と両親や周りの大人に言われていた(ように思う)。周りの大人たちからすれば褒め言葉のつもりだったのかもしれないが、私にはちよつと複雑なメッセージとして伝わっていた。「女で惜しかった、つてことは女だからダメだつて意味? それとも女としてダメつてこと?」。

やがて思春期になり、ちよつとでも弟をあごで使うような振る舞いをする、今度は母親から「あなたは女の子なんだから……」とよく怒られた。男を上回るような振る舞いはいけないというわけである。そのたびに「男は楽で、のびのびできていいなあ。男に生まれてきたかったなあ。女で損したなあ」と思っていた。仕事をするようになり、結婚して子育てをするようになって、その思いは続

いていたように思う。むしろ、子育て真っ最中のときのほうが強かった。「どうして女ばかりがやらなくちゃいけないの」とイライラしていた。

それが、このところ「女でよかった」と思っている。40歳で妻の役割から降り、50歳近くになって母親の役割が軽くなり自分のために使う時間が多くなった。そして、自分でもおばさんになったことを実感し、男を脅かさなにかわいらしい女になれないなんてことに悩まなくてもいいんだと吹っ切れて、楽になった。つまり、期待されている女役割がしっかりと刷り込まれていたというわけだ。

映画を観ているようだと表現したが、映画よりも、言いっぱなし聴きっぱなしのグループに参加している感覚のほうが近いかもしれない。それぞれの物語を読んでいるうちに自分の感情が揺さぶられ、今さら言っても仕方がないと諦めていたこと、でも小さな塊として引っかかっていたものが言語化され、ほぐれていった。そして、できればもつとはやくこういう本に出会いたかったと思った。

家事・育児や親の介護で大変な状況にいる人はもちろんのこと、多くの女性、いや男性にも読んでもらいたい本だと思う。